

〈道徳〉

共に学び、未来を切り拓こうとする態度を持った児童の育成

——多面的・多角的な思考を促す発問と対話を通して（第3学年）——

読谷村立古堅小学校教諭 石川 奨

I テーマ設定の理由

グローバル化の現代において、様々な文化や価値観を相互に尊重し合いながら生きることや、科学技術の発展や社会・経済の変化の中で、人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ることが一層重要な課題となる。こうした課題に対応するため、社会を構成する主体である一人一人が、人としての生き方や在り方について、時に対立しながらも多様な価値観の存在を認識しつつ、他者と対話し協働しながら、よりよい生き方を目指すことが重要であり、道徳教育はその大きな役割を担っている。

そうした中、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』（以下、『解説道徳編』）において、道徳科の目標が「（前略）よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と示されている。また、本校は学校教育目標に「ふるさとを愛し 共に学び 未来を切り拓く 古堅っ子の育成」を掲げている。これらのことから、児童が、様々な視点で物事を考えることが重要で、他者と共に学びを深め、自己の生き方についての考えを深める児童の育成が必要となる。

私自身の実践を振り返ってみると、児童の思考をゆさぶり発言したくなる発問を行い、それぞれの考えを尊重しながら授業を展開する工夫を行ってきた。導入では、学習のねらいを児童がとらえられるような発問の工夫を行い、展開では、登場人物と自我関与させる発問やペア活動の場の設定を行った。また、終末では、学んだことの振り返りを自分の言葉でノートにまとめ発表させる取り組みを行った。その際、児童は、教材に設定されている主たる内容項目（ねらい）に即した発言やノートの記述が見られた。また、児童の中には、その他の内容項目や、他者の考えと違う視点から考える様子が見られたが、授業内での発言には至らず、児童同士の交流を行わせることができなかった。その理由を児童に聞いてみると「間違えている気がした。」「みんなと違う意見が言えなかった。」と回答し、児童に自分の考えを表出させる発問や対話の工夫が不十分であった。そのため、授業内では、主たる内容項目での考えの深まりは見られたが、共に学び多面的・多角的な視点から考え、深めるにつなげることができなかった。

本研究では、児童が対話から考えを深める活動を目指すため多面的・多角的な思考を促す発問として「考えを広げる発問」と「考えを深める発問」の工夫を行っていく。対話を行うためには、児童がすでに持っている道徳的価値を教師が表出させ、話したくなるきっかけを作る。

児童が対話を通して、違う視点で考えている道徳的価値観をつなぎ、多面的・多角的な視点から教材を捉えることで違う道徳的価値観に気づき、考えが広がっていく。そして、考えが広がった状態からねらいに対する価値を深めさせるため、考えを深める発問を行い、他者との考えを取り入れながら、自分の考えを見つめなおす。

これらの工夫を通して、よりよく生きる道徳性が養われ、共に学び、未来を切り拓こうとする態度を持った児童が育成されると考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

授業において、児童の多面的・多角的な思考を表出させる発問を行い、対話をさせることで、物事を考え、深め、共に学び、未来を切り拓こうとする態度を養うことができるであろう。

II 研究内容

1 共に学ぶとは

『解説道徳編』には「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うためには、児童が多様な感じ方や考え方に接することが大切であり、児童が多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事を多面的・多角的に考えることが求められる。」と示されている。また、永田繁雄（2017）は「子供は、物事を多面的・多角的に考える学習を通して、価値理解と同時に人間理解や他者理解を深め、さらに自分で考えを深め、判断し、表現する力などを育み、同時に自己の生き方について考えを深めることができるようになる。」と述べており、これは、児童が他者と対話や協働することを通して、児童の価値理解、人間理解、他者理解について自分の考えを深めることを示している。児童が他者と対話や協働することを通して「〇〇さんの言うこともわかるな。」「その考えは思いつかなかったな。」など自分自身にはなかった新たな考えと出合い、自身の考えとつなぎ合わせて考えを深めていくことが「共に学ぶ」姿だと考える。

そこで、児童が「共に学ぶ」ことができたか見取る視点として『解説道徳編』に示される「児童が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させていること」という点に着目する。対話や協働することを通して、多面的・多角的な思考へと考えが深まったかを見取る。

2 未来を切り拓こうとする態度とは

道徳性を構成する諸様相には、善悪を判断する道徳的判断力と、善を喜び、悪を憎む感情の道徳的心情に加え、道徳的実践意欲と態度がある。浅見哲也（2019）は「道徳性の諸様相には特に序列や段階があるということではなく、一人一人の子供が道徳的価値を自覚し、自己の、あるいは人間としての生き方についての考え方を深め、日常生活や今後出会うであろう様々な場面、状況において道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質を意味している。」とし、児童がこれから出会うであろう様々な場面において、適切な選択ができる内面的資質の育成が重要であるとしている。このことから考えると「未来を切り拓こうとする態度」とは、道徳の授業を通して、児童が道徳的判断力や道徳的心情を基盤としながら「これから〇〇して頑張っていきたい。」「自分も〇〇に挑戦してみたい。」と考え、道徳的実践意欲と態度を養っていかうとする姿だと考える。

そこで、児童の「未来を切り拓こうとする態度」を見取る視点として『解説道徳編』に示される「道徳的価値の理解を自分との関わりで深めていること」という点に着目する。児童のノートの記述からどのように自分自身を振り返っていたかを見取る。

3 多面的・多角的な思考を促すためには

『解説道徳編』には「道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えるという道徳的価値の自覚を深める過程で、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われるのである。その中で、自己や社会の未来に夢や希望がもてるようにすることが大切である。」とし、未来を切り拓く態度を養うためには物事を多面的・多角的に考えることは重要であると示されている。

「多面的・多角的」について赤堀博行（2017）は親切という側面で考えたとき多面的とは「親切とは、相手の立場や気持ちを考えて手を差し伸べることでもあり、見守ることでもあるのです。」とし、様々な面から親切を考え、場合によっては親切をすることが難しいことなどに気づき、理解を深めることなる（図1）。また、多角的とは「親切な行為には勇気も必要になるものです。」とし、親切という行為を行う時、行動のきっかけには勇気や公正・公平といった関連する価値から始まることもあ

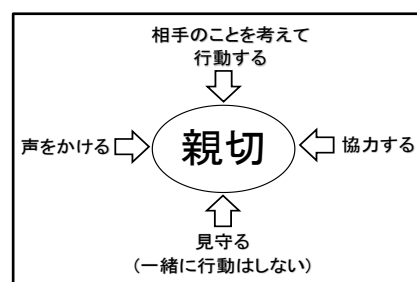


図1 多面的のイメージ

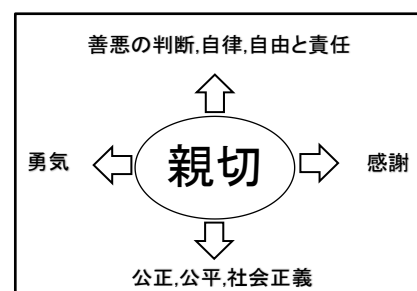


図2 多角的のイメージ

り、関連する価値への理解を深めることが重要だとしている（図2）。そこで、本研究では、多面的・多角的な思考を促すために発問と対話の工夫の2点を行っていき、研究を進めていく。

4 発問の工夫

発問について『解説道徳編』には「教師による発問は、児童が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための思考や話し合いを深められる上で重要である。」と示されている。また、浅見は「活動のきっかけを作るのは教師の発問であると言っても過言ではない。（中略）発問を精選して、子供がその授業のねらいとする道徳的価値について深く考えられるようにすることが大切である。」と述べており、発問をきっかけに児童同士が共に学び合い、自己を見つめなおし、価値について深く考えていくために教師の発問の工夫が重要である。

そこで、本研究では、児童に多様な考えを生み出す「考えを広げる発問」、多様な考えをもとに多面的・多角的な視点で今後の生活へつなげていく意欲を高めるための「考えを深める発問」の2点を行っていく。

(1) 考えを広げる発問

導入の場面で、自己を見つめなおさせ、自分の考えを持たせた後、各児童の内面にある思考を表出させるための「考えを広げる発問」を行う。児童の内面にある考えを表出させる工夫として、加藤宣行（2018）は「道徳的価値には、考えなくてもそれに従えばよいという一般的な見解があり、それが妨げになることがあります。（中略）『嘘を認めない立場』で話し合いを進めるのと『嘘をつく人間も認める立場』で議論するのでは、着地点が違ってくるのです。」としている。例えば、内容項目が「親切，思いやり」で、図3の①のような「親切ってどんなことだと思いますか。」といった生活経験を振り返って考える発問を行うと、児童は「人にやさしくすること」（「親切，思いやり」）だけではなく、「手伝う。助ける。」（「友情，信頼」）といった関連する内容項目から考えることもある。これは、同じ「親切，思いやり」を考えても、生活経験の違いから、様々な考えが出てきていると言える。児童の多様な考えの広がりから、ねらいにせまる思考へと深めるために「考えを深める発問」の工夫を行っていく。

(2) 考えを深める発問

浅見は「子供が自己の生き方について考えを深めるためにも、教師が明確な意図をもって授業を行うことは欠かせない。（中略）授業では、ねらいとしている道徳的価値について感じたことや考えたことを通して自己を見つめ、自分自身の生き方について考えられるようにする。」としている。児童に多様な考えが生まれた状態から、ねらいとしている道徳的価値についての「考えを深める発問」を行い、自己の生き方についての考えを深めていくことが重要である。

「考えを深める発問」の工夫として、教材と自分自身をつなげながら、多面的・多角的な視点で道徳的価値を見つめなおし、今後の生活への思いを持ち、生活へつなげていこうとする意欲が持てるようにする。

例えば、児童が自分の特徴を知り、自己の伸ばしたい部分を深く見つめられるような発問の工夫や、自己の生き方を実現していこうとする思いや願いを深めるための工夫、道徳的な価値の問題として受け止められる工夫を行い、今後の生活への意欲へとつなげていく（図3④～⑥）。

(1) 考えを広げる発問	予想される児童の姿
①親切ってどんなことだと思いますか。 ②親切な人ってどんな人がいるだろう。 ③親切にされる(する)とどんな気持ちになりますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・親切は人にやさしくすること。手伝う。助ける。協力する。 ・親切な人は、家族。先生。友達。地域の人。 ・親切にされる(する)とうれしい。
(2) 考えを深める発問	予想される児童の姿
④自分だったら、どうしますか。(理由も聞く) ⑤親切をするのに大切なことは何だろう。 ⑥これからの生活に生かせるところは？	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんの話を聞いて、協力して声をかけたいです。 ・親切には、相手の気持ちになって考えることだけでなく勇気が大切だと思った。 ・親切にすることで、周りの人に親切が広がっていく。

図3 加藤（2019）浅見（2019）の理論を参考に作成した、発問の工夫例と予想される児童の姿

5 対話の工夫

(1) 話し合い（対話）とは

『解説道徳編』には「児童が多様な感じ方や考え方に接する中で、考え方を深め、判断し、表現する力などを育むことができるよう、自分の考えを基に話し合ったり書いたりするなどの言語活動を充実すること。」とあり、児童の多面的・多角的な思考を促すには、児童が自分の考えを基に、言語活動の充実を図ることが重要であるとしている。その中で「話し合いは、児童相互の考えを深める中心的な学習活動であり、道徳科においても重要な役割を果たす。考えを出し合う、まとめる、比較するなどの目的に応じて効果的に話し合いが行われるように工夫する。」とあり、言語活動の中でも特に話し合い（対話）は、考えを深める上で効果的だということが示されている。

本研究では、発問によって表出した児童の考えの交流を通して深めさせていく際に対話を中心として行っていく。対話の対象として、赤堀は「子ども同士、あるいは子どもと教師で行うことが基本です。」と述べ、それぞれペアやグループでの対話を通して考えを交流させる。それに加え、児童に自分事として考えさせるための自己内対話も必要である（図4）。

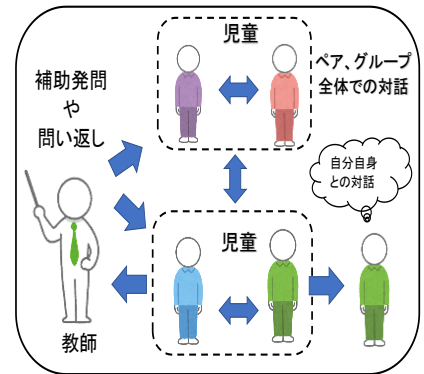


図4 対話のイメージ図

(2) 考えを広げ、深めるための対話の工夫

補助発問について、加藤は「同じ発問を子どもたちが共有できるように、別の言葉で言い換えたり、具体的にやさしく聞き直したりする類の発問です。」としている。そのため、一つの発問に対してイメージが難しい児童に対して、教師が具体例を示しながら発問を行っていく。

また、問い返しについて、加藤は「問い返しは、子どもたちの発言をいったん懐に入れて、咀嚼し、その上で『なるほど、そういうことか、だったら……』と次への一步を暗示するような発問です。」としている。つまり、教師は児童の発言をしっかりと受け止め、本人や他の児童へとつないでいくことやあえて違った視点からの発問で児童の考えをゆさぶるなどの工夫を行う。これらを用いて、授業を進めることで、児童の内面にある考えを表出させ、思考を広げ、深めることができる。

円滑な話し合いを行うためには、教師がペアやグループへ介入した際、補助発問や問い返しを用いてファシリテートし進めていく。また、ペアやグループだけでなく、考えを全体で共有する。そうすることで、児童は、更に多くの新たな考えに出会い、多様な考えに触れる。そして、授業始めとは違う新たな考えを導き出すことができ、自分自身との対話を通して考えを深めていくことができる。

表1 問い返しのポイント及び具体例

教師の手立て	C: 児童	T: 教師
①	子どもの発言をそのまま繰り返す、それを本人や他の子に自分の言葉で発表させる。	C: 「親切とは、相手を思って行動することです。」 T: 「親切は相手を思って行動することなんですね。〇〇さんの言ったことを自分の言葉で説明してください。」
②	教師なりの受け止め方をして、子供の発言を本人や他の子どもたちに返し考えさせる。	T: 「親切とは、相手を思って行動することという意見がありますが、少し難しいです。だれか、例えばと付け加えて話してくれますか。」
③	子供の発言を違った角度から返し、考えをゆさぶる。	T: 「親切は、相手を思いやって行動することなんですね。では、心に思っているけど行動できないときはどうなんだろう。」

加藤（2018）を参考に作成した「問い返しのポイント」

6 学校教育目標と道徳における評価

道徳教育における評価については『解説道徳編』に「教師が児童一人一人の人間的な成長を見守り、児童自身の自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気づける働きをもつようにすることが求められる。」と示されており、児童自身の今後の生きる力につなげていけるものにしていくことが大切である。

毛内嘉威（2018）は、評価のための具体的な工夫として「子供が学習を通じて多面的・多角的な見方へ発展させていることや、道徳的価値の理解を自分との関わりで深めていることを重視し、これらの状況や様子を見取るための様々な工夫が必要である。」としている。

このことから本研究では、表2の視点を基に「子供が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」の2点を重視する。

具体的には、授業の始めと終わりの児童の変容がわかる振り返りの記述を中心に児童の変容を見取っていく。表2の視点から児童が授業のねらいに迫る際、どの視点で考えていたのかを見取り、評価の手立てとすることで、この2つの視点と関連ある「共に学ぶ」「未来を切り拓こうとする態度」の見取りにもつながる。また、評価は児童の学習状況及び成長の様子の評価だけでなく、教師自身の授業改善の評価の視点としての考えを踏まえて行っていく。

表2 「子供の学習状況及び成長の様子についての評価」

(1) 子供が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか	
① 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やその時の心情を様々な視点から捉え考えようとしていること	ア ねらいとする道徳的価値の様々な面を考えている イ 道徳的価値を支えている様々な根拠を考えている
② 自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしていること	ア 様々な登場人物の立場で考えている イ 自分の考えと友達のことを比べて考えている
(2) 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか	
① 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしていること	ア 教材の登場人物に自分を置き換えて考えている イ 教材の問題点を自分事として受け止めて考えている
② 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる部分に着目すること	ア 日常生活や学校生活を想起しながら考えている
③ 道徳的な問題に対して自己のとりうる行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解をさらに深めていること	ア 生活を見つめ、自分だったらどうするかなどを考えている

毛内（2018）より一部抜粋

Ⅲ 指導の実際

1 指導計画（4時間） 教科書『小学校どうとく ゆたかな心 3年』光文書院

実践	日	「教材」 主たる内容項目 関連する内容項目	主題名	ねらい	発問の工夫 ○広げる発問 ◎深める発問	対話の工夫 ※は中心となる活動
1	6/3	清作のおてつだい C 家族愛, 家庭生活の充実 B 感謝等	自分 に で き る こ と	「家族を思う心」を大切にしながら、家族のため自分のできることをしようとする。	○お家の手伝いは何をしますか。その時の心は。 ◎家や学校で自分ができるは何かあるだろう。	※ペア 全体
2	6/24	心の優先席 C 規則の尊重 B 親切、思いやり等	き ま り を 生 む も の	約束や社会のきまりの意義を理解し、それを守ろうとする。	○3人の考えで一番良いと思った考えはどれ。 ◎学校や生活のきまりはどうしてあるのかな。	※グループ 全体
3	7/1	はた・らく C 勤労、公共の精神 C 家族愛, 家庭生活の充実等	す す ん で は た ら く	周りの人のことを考えて働くと感じ、自分もうれしい気持ちとなることが分かり、進んでみんなのために働こうとする。	○どうしてはたりますか。 ◎これからはたらく時にたいせつにしたいことは何ですか。	ペア ※全体
4	7/8	わたしのしたこと B 親切、思いやり A 善悪の判断、自律、自由と責任等	親 切 と お せ っ か い	親切とおせっかいの違いに気づき、相手の立場や気持ちを考えて、進んで親切にしようとする。	○親切とわたしのしたことの違いは何。 ◎親切に大切なことは。	ペア ※全体

2 本時の指導

第4回「わたしのしたこと」

(1) ねらい 親切とおせっかいの違いに気づき、相手の立場や気持ちを考えて、進んで親切にしようとする態度を養う。

(2) 展開

過程	学習活動と主な発問 ○発問 ●問い返し	子どもの予想される反応	指導上の留意点（手立て）
導入	1 登場人物の紹介	・二人は友達かな？	・登場人物の特徴を知り、行動に対する理由を考えやすくする。
展開前段	2 教材を読む。内容把握 3 考えを広げる発問 ○「わたしのしたことから考えると、親切ってどんなことだろう。」 ※自分の考えをまとめ、理由を伝え合う。 ●「相手のことを考えてやったことは親切になるのでは？」	・親切とは・・・。 ・私は○○と書いたよ。 ・どうしてそう思ったの？ ・おせっかいに「相手を考える」が書かれている。	・わたしとノンちゃんの間行動と意思を板書に示し、可視化する。 ・まず全体でわたしのしたことについてウェビングを使ってある程度考えを広げていき、その後、親切について個人でノートにまとめ、ペアで交流をさせる。
展開後段	4 考えを深める発問 ◎「親切に大切なことはなんだろう。」 ●「もし、自分が『わたし』だったらどうしたらよかったかな。」	・相手に聞いてみる？ ・表情をみる？ ・親切がおせっかくなるかもしれないから、考えて行動する。	・自身の考えと他者の考えをもとに、親切について考えさせる。 ・自分の経験を思い出し、これからの生活につなげて考えさせる
終末	5 振り返り	・親切とは、相手のことをよく考えてみることだと思います。	・振り返りの視点をもとに書かせる。

IV 仮説の検証

研究仮説に基づき、教師が児童の多面的・多角的な思考を表出させる発問を工夫し、対話させることで、児童が考えを深め、共に学び、未来を切り拓こうとする態度を養うことができる手立てとして有効であったか、児童の発言や様子、ワークシート、検証授業後に行ったアンケート調査の分析より検証する。

1 第2回検証授業における工夫点と授業の実際

第2回検証授業では『心の優先席』の教材を使用した。3人の児童が電車の中で立つお年寄りを見て、優先席の在り方について話し合っている姿を登場人物の男性がそばで見ている内容である。3人の視点(図5)から内容項目「規則の尊重」や「親切、おもいやり」といった多面的・多角的な視点で考えられる教材となっていた。

本時では、児童が共感し、考えられるようにするため、思考の基になる考えとして登場人物3人の考えを取り出し、それぞれの気持ちを考えさせた後「考えを広げる発問」として「3人の女の子の中で自分が一番いいと思った考えはどれですか。」と発問を行った。

3人の考えを基に、児童が自身の立場を決め、挿絵のそばにネームプレートを貼り付けて、他者と考えの立場の違いを認識し、明確にさせ、考えをまとめさせた(図6)。3人の考えを基にしながら、児童に自分の内面にある思考をうまく表出させながら文章化させていった(図7)。書き終わったら、近くの子とグループで交流させ、自身の考えとの共通点、相違点を比較させながら考えさせた。ペアでの交流後、教師が「友達の考えでよかったものはありましたか。」と聞くと、数名の児童から自身の考えと同じ考えや、違う考えを発表する姿が見られた。児童の発言を板書していくと、児童はノートにある考えと板書に出てきた考えとを見比べて、また思考していく姿が見られた。

次に「考えを深める発問」として「学校や生活のきまりは

児童① 優先席のきまりをまもるべき
児童② 近くの人が譲るのがいい
児童③ 譲りたい人が譲るのがいい。

図5 登場人物の視点

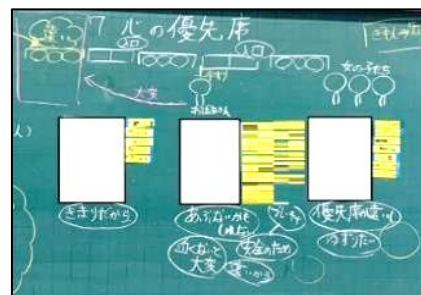


図6 ネームプレートで思考の表出

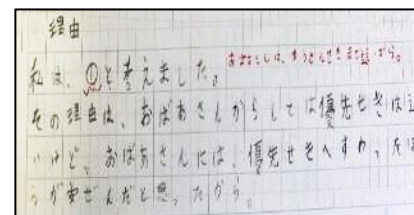


図7 児童Aのノート

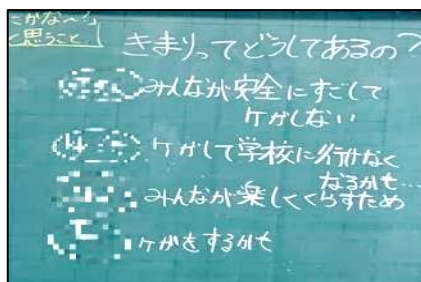


図8 考えを深める発問

どうしてあるかな。」と実生活の規則と教材で出てきた規則を結び付けて考えさせた（図8）。児童は、自身の考えとグループで話した考え、板書にある考え等を基に学校や生活での規則の意義について考えをノートにまとめていた。

授業を通してみると、児童は規則について多面的・多角的に考え、自身の考えをノートにまとめることができている。しかし、児童自身の中にある考えを文章で表すことに困難さを感じている事や、思考を整理し書き出すまでに時間がかかる等の様子が見られ、思考を表出させる手立てが不十分だった。

また、教材に出てくる「優先席」という規則を初めて知る児童がほとんどだったことから「今日分かったことは、電車やバスの優先席のことでした。」や「優先席は、妊婦さんやお年寄りの人が座るってということが分かりました。」という優先席に対する振り返りの記述が見られた。

2 第4回検証授業の工夫と授業の実際

第4回検証授業では『わたしのしたこと』の教材を使用した。色塗りの得意なおせっかいの主人公が絵を描くことが好きな友達のノンちゃんに対して、ノンちゃんの描いた絵に親切のつもりで色をぬってしまう。そのことから、ノンちゃんは落ち込んでしまい、わたし自身も自分のしたことについて考え直す内容となっている。内容項目が「親切、思いやり」で構成されており、親切とおせっかいの違いに着目する際「友情、信頼」の視点でも考えられ、そのため、子ども達に多面的・多角的な思考がうまれる。

「考えを広げる発問」として「わたし(主人公)のしたことと親切の違いはなんですか。」と発問を行った。児童は親切に対する概念はあるが、親切とおせっかいの2つを比べて考える経験は少なく、2つを比較し、見つめなおすことで、主人公の行為(おせっかい)から親切の新たな側面に気づくと考えた。

また、考えを広げていく際の工夫としてウェビングを活用した(図9)。前回思いを文章で書くと時間がかかったため、箇条書きで行うことにより、自身の考えをうまく表出させ、多様な考えの広がりが見られた(図10)。

児童の様子を見ているとすぐに書き出せる児童と、そうでない児童が見られた。訊ねてみると「どんなことを書けばいいのか分からない。」という児童もいたため「親切にされたことありますか。親切にしたことはありますか。」と補助発問を行い、親切にされた経験を思い出させ、その事を基に記述するよう声をかけた。自身の考えをノートにまとめさせた後は、ペアでの対話を行わせて、他者の考えを聞いてよい考えだと感じたら、図10の太丸の部分のように考えを追加させていった。そうすることで、自分以外の考えが明確にわかると考えた。そして、児童が交流を通して広げた考えを再度全体で共有し、更に広げられるような工夫を行った。

次に「考えを深める発問」として「親切に大切なことは何ですか。」と発問を行った(図11)。また「わたしの親切に足りなかったことは何だろう。」と補助発問を行い、児童に問いをもたせた。そうすることで、自身と登場人物を重ね合わせながら友達に嫌な思いをさせないために話し合った考えを基に自身の思考を整理しノー



図9 ウェビングによる思考の広がり



図10 児童Bのノート

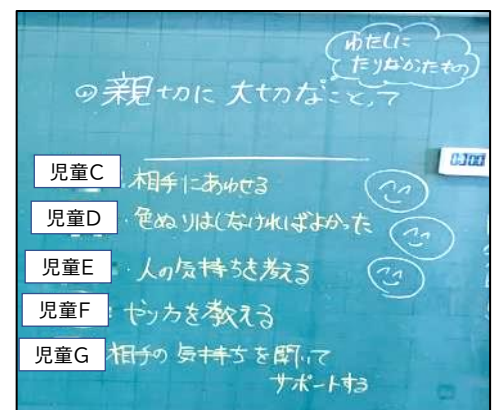


図11 考えを深める発問

トにまとめさせた。

そこから、数名の児童に考えを公表してもらった。児童Cは「相手に合わせる」と考え、これは他者の「自分勝手にやるといい気持ちではなくなる。」といった考えを聞いて新たに考えを導き出していた。児童Dは「色塗りはしなければよかった。」と考え、全体の考えをしっかりと聞き、自分事として捉え考えていた。児童E、F、Gは「相手のことを考えると考えていた。」この発言は、全体で共有し、表出した考えであった。

これらのことから、児童は、「考えを深める発問」により改めて、自身の思考を再構築し、自分ならどうするのかと自分なりの根拠を持って考えている姿が見られた。

3 共に学ぶ姿

(1) アンケート調査より

検証授業後のアンケート調査から「共に学ぶ」に関連する項目を分析する(図12)。「道徳の授業で、友達の考えを聞いて納得や疑問に思ったことはありますか。」という項目で「ある」「たまにある」と答えた児童が21人(88%)だった。その理由として「友達の考えを聞くと、いいなと思った。」の意見が一番多く、児童は他者の考えを聞き入れることに肯定的ということが分かった。

しかし「あまりない」「ほとんどない」と答えた児童の多くは、「納得することはあるが、疑問はない。」と答えていた。これは、児童への自身の考えと比べられる問い返しや補助発問が弱かったため、児童に自身の考えを多面的・多角的にとらえさせることが不十分であったことを示している。

また「道徳の授業で始めと終わりで考えが変わったことはありますか。」という項目(図13)では、検証前では「よくある」「たまにある」が14人(54%)、検証後には19人(73%)だった。児童の理由に「友達の話を聞いていくうちに考えが変わっていく。」とあり、共に学ぶことで児童は多面的・多角的な思考な見方を身に付けていると考える。

しかし「あまりない」「ほとんどない」と答えた児童には「友達の考えと比べると、自分の考えがいいと思う。」や「話が予想通りだった。」「難しい。」等と話し、他者の考えを聞き、自身の考えと比較することはできていたが、考えを取り入れてまとめるといった過程までつなぐことが難しいと感じる児童もいたと考えられる(図14)。

(2) 学級全体より

第2回と第4回の検証授業から、児童の記述より「共に学ぶ」児童についての分析を行う。他者の考えをワークシートに記述している児童は第2回では19人(73%)、第4回では24人(92%)であった。また、他者の考えを聞いて振り返りの記述に取り入れていた児童は第2回では5人(19%)であったのに対して、第4回では15人(58%)に上昇した(図15)。半数の児童は他者の考えを聞き、考えを多面的・多角的に考え、振り返り

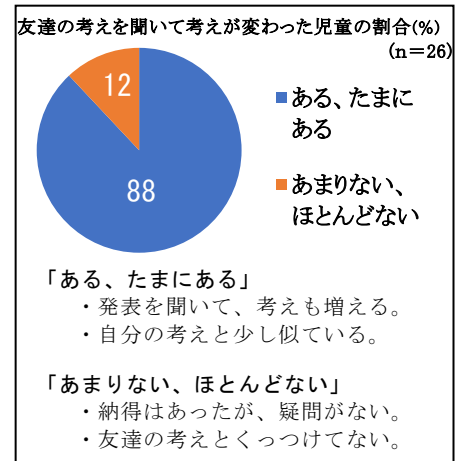


図12 友達の考えを聞いて考えが変わった児童の割合とその理由

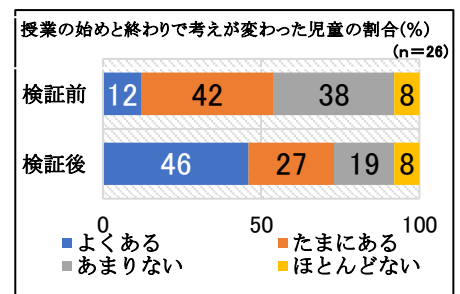


図13 「共に学ぶ」の変容を見取るアンケート

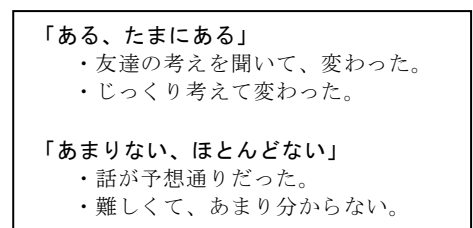


図14 アンケートの理由

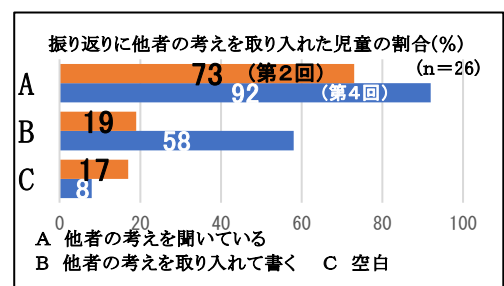


図15 「共に学ぶ」考えを記述している児童の割合

の記述を行っていることが分かった。第2回では個人で振り返りを考えている姿が多く見られた。しかし、第4回では「考えを広げる発問」で考えの立場を明確にし、多面的・多角的な視点を持たせたことで、振り返りを書く際に自身のノートだけでなく板書を何度も見返しながら他者の考えを取り入れて書こうとする姿が見られたことによると考えられる。

(3) 抽出児童より

第2回と第4回の検証授業をもとに、児童を抽出し、対話を通して、他者の考えを取り入れている記述の変化を検証する。第2回の振り返りでは、児童Hは、当初、他者の考えを聞き取るのが難しく空白になっていたが、第4回の授業では、考えを取り入れて書くことができていた(図16)。

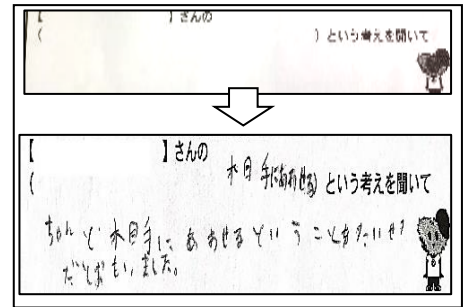


図16 共に学ぶ姿の記述の変化が見られた児童Hの記述

また、児童Iは、第2回では他者の話を聞くことはできていたが、考えを取り入れることには難しさが見られたが、第4回では他者の考えを取り入れ多面的・多角的な視点で授業を振り返ることができていた(図17)。

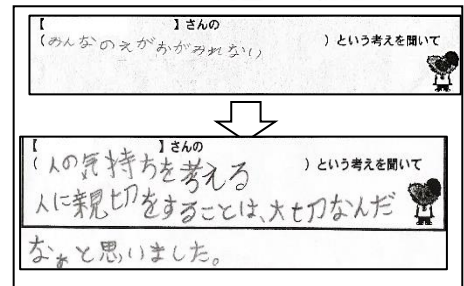


図17 共に学ぶ姿の記述の変化が見られた児童Iの記述

4 未来を切り拓こうとする態度

(1) アンケート調査より

検証授業後のアンケート調査から「未来を切り拓こうとする態度」に関連する項目を分析する。「道徳の授業後でこんな自分になりたいなやこんなことをがんばってみようと思ったことはありますか。」という項目で実施した。検証前は「よくある」「ある」と答えた児童が23人(87%)だったことに対して、検証後では25人(96%)に上昇した(図18)。理由としては「道徳の授業を通して、登場人物の行動や気づいたことに感動し自分もやってみたいと思う。」等の意見が多くこれからの生活に生かそうしている姿が見られた。

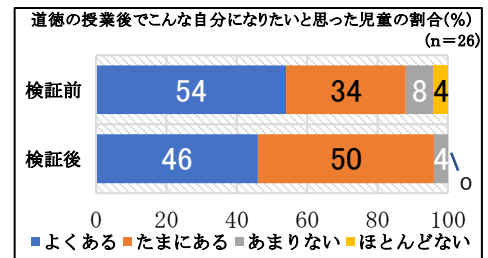


図18 「未来を切り拓こうとする態度」を見取るアンケート

(2) 学級全体より

第2回と第4回の検証授業で行った、児童の記述より「未来を切り拓こうとする態度」の分析を行う。「〇〇していきたい」や「〇〇に挑戦してみたい」等の未来への展望の記述があった児童は、第2回では4人(15%)であったのに対して、第4回では9人(42%)であった(図19)。児童の中には今後の生活へ生かしていきたいと考える児童も増えつつあったが、まだ、教材の感想や、「道徳の授業が楽しかった。」等の授業の感想を書く児童が見られ、実生活と授業のつなげるための発問の工夫を行っていく。

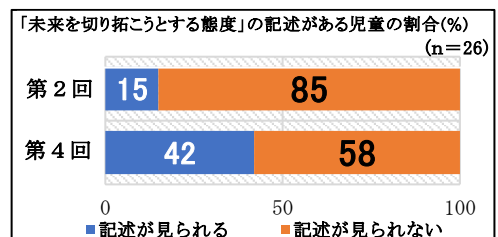


図19 「第2回と第4回の検証授業後の記述比較

(3) 抽出児童より

第2回、第4回の検証授業をもとに児童を抽出し、対話を通して、「未来を切り拓こうとする態度」についての記述を「〇〇していきたい。」や「〇〇に挑戦してみたい。」と考え道徳的実践意欲と態度を養っていこうとしているかに着目し、分析を行った。そこで、児童を抽出し、

〈参考文献〉

- 浅見哲也 2020 『こだわりの道徳授業レシピ～あなたはどんな授業がお好みですか？～』 東洋館出版社
- 佐藤幸司 2020 『WHYでわかる！ HOWでできる！道徳の授業Q&A』 明治図書
- 『道徳教育』編集部 2019 『考え、議論する道徳をつくる新発問パターン大全集』 明治図書
- 加藤宣行 2018 『加藤宣行の道徳授業 考え、議論する道徳に変える発問&板書の鉄則45』 明治図書
- 加藤宣行 2018 『加藤宣行の道徳授業 実況中継』 東洋館出版社
- 毛内嘉威 2018 『道徳授業のPDCA指導と評価の一体化で授業を変える！』 明治図書
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』 廣済堂あかつき
- 赤堀博行 2017 『「特別の教科道徳」で大切なこと』 東洋館出版社
- 加藤宣行 2017 『授業と見取りのポイントが分かる！子供に寄り添う道徳の評価』 光文書院
- 永田繁雄 2017 『平成29年度小学校新学習指導要領ポイント総整理特別の教科道徳』 東洋館出版社
- 加藤宣行 2012 『道徳授業を変える 教師の発問力』 東洋館出版社